

更新伝道

No.135

発行:更新伝道会

発行者 会長 佐野英二
編集 編集委員 会
委員長 岩本 聖史
(通信先) 千六五〇〇三五
中野区白鷺一四七一〇
Tel 〇三(三三三三)八七九七三

【更新伝道会大会】 開会礼拝説教

「あなたがわたしと共にいてくださる」

詩編二三編一〜四節

青山学院長 山北宣久



霊的賜物を備えられているメソジスト・ソサエティとしての更新伝道会の大会が青山学院を会場として開催されることにより、学院の原点が明らかにされることとなるゆえ感謝してやまない。今、メソジスト・ソサエティと言ったが更新伝道会が霊的覚醒と伝道への情熱を持って教団を教団

たらしめ、青山学院を学院たらしめつつ前進せられんことを切望する次第である。

本年召天百年を記念された本多庸一はこういった。

「基督教の悟道は克己献身にある。己の身を後にして基督に従い、己の意志を後にして基督の意志に任す。是れ基督の心を知る道である。(中略)最も貴い事業に自分を任せ高き意志におのれを従わせる。是れ基督の献身である。」

義認後の聖化の方向を「献身」に定めたことは今日さらに大きな意味を持つ。この点にても目覚めを与えられたい。

先程共に聞いた有名な詩二三編は今日の青山学院の聖書日課であ

る。これは聖書の中のナイチンゲールと言われている。世の闇が深ければ深い程美しく唄う夜鳴き鶯よろしく暗い現実にて打ち震えて多くの人々を慰め、包み、立ち上がらせつつ今日に至る。

三節に「主は魂を生き返らせてくださる。」とある。英訳聖書には *He renews my life* とある。これは新約の光のもとで読むと主の復活、永遠の生命を示す言葉だと受け止めさせられる。

そして、このことの決定的言葉が四節にある。「死の陰の谷を行くときも、わあしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。」

この四節から主という三人称単数から「あなた」という二人称に移っている。「あなたとわたし」という関係で神と人の間が語られるに及んで、この詩編は十字架と復活において私たちの救いを完成させて下さる。主イエスにあって神の言葉になることを受け止めさせられ、恵みに包まれる

主イエスは何のためにこの世に來られたのか。それは「死の陰の谷を行くときも私は災いを恐れない。」現実をもたらずためである。

私たちは屢々、揺らぎ、恐れ、不安定になる。ジョン・ウエスレーも一七三五年米国ジョージアに向かう途上、嵐に遭遇し、死の怖れの中に失神した。

そんな中二六人のモラヴィアの信徒たちの死を越えてある神への信頼に生きる姿に信仰の受け取り直させられ、回心を経験した。

同船していたチャールズ・ウエスレーは「キリストが共におられるので、死の陰の谷も恐れない」と言って一七八八年三月二九日天に凱旋した。

その三年後の三月二日ジョン・ウエスレーは「最も善いことは、神が我らと共におられるということである」と語ったのち、その絶えざる祈りの聴き手であられた方のもとへ旅立っていった。

更新伝道会に連なる人とはこの先達のあとを辿りゆく。

「あなたが」「わたし」と「ともに」「いて」「くださる」この五つの単語に全身全霊を委ねつつ、進み行く群れがここにある。

「見よ、私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」と約束して下さる主のもとに伝道する人々が此処に居る。

主題講演Ⅰ

「北陸のメソジストたち」

大隅啓三 牧師



第二金沢部会記録（二八九二年・明治三三年）には『D・R・マッケンジーは五カ年間旅行し』とあります。この「旅行」はご存じのように、物見遊山をしたということではありません。メソジストが開発した伝道方法です。伝道とは自分の拠点教会に閉じこもっていないのではなく、サーキット内の諸地点にある伝道地と講義所を巡り歩いて、伝道し、部会に伝道報告をすることなのです。こうした伝道「旅行」をするのがメソジストである条件でした。

マッケンジーは信徒伝道者として来日し、教師試補として五年間実際に伝道し、金沢部会の教師試験を受けて合格し、日本西部年会で按手札を受けました。かくて正式にカナダ・メソジスト・ミッションの会員となつて大きな活躍をすることになります。

その結果として、約五十年間に金沢部会は三県下に十一教会と八伝道地に六講義所を建設しまし

た。これは今日では考えられないほどの大成果と言えるでしょう。北陸のあらゆる地域に旅行し、伝道した果実がそこ此処に見られます。

たとえば、能登半島の先端にある輪島にもキリストの教会は建っています。ここに種が蒔かれた時期にはまだ鉄道が引かれていませんでした。そうした難路をもとめせずに伝道したのがメソジストの先輩たちです。

そんな困難を冒して伝道した割には教会が大きくなっていないという批判がありうるでしょう。確かに輪島の教会は未だに第一種教会になってはいない。しかし、その

『輪島教会七十年史』によれば、その時点での転出者は七十名であった。この七十名は消えてなくなつたのではない。その転出教会員たちは職業や進学の都合で東京とか関西などの諸都市や県庁所在地などに転居して、その教会で信仰生活を続けているばかりでなくて、教会役員として積極的にご奉仕してくださっている方々がおられるのである。この輪島のような教会がある人は苗床教会と称したが、それにも一理がないことはない。

中部教区はそうした諸教会の存在の意味を積極的に認めて、応援して、伝道者を送り続けている。これが諸教会には大きな力となっているのは事実である。確かにメソジストが実行した地方伝道では前述したような小教会や伝道所が多いかもれない。しかし、そうしたものが各地に散在し、キリストの香りを漂わせているのは有り難いことなのである。

カナダ・メソジスト・ミッションは人材と資金を惜しまずに日本宣教に力を入れて下さった。昭和初年に金沢部会だけでも日本人伝道者だけでも二十数名が教会にご

奉仕して下さっていた記録が残されている。その人件費だけでも膨大なものであつたらう。確かに、自立教会はその教会で牧師給を支出していたのに違いないが、そういう自給教会は部会内では三教会に過ぎなかつた。もちろんそれぞれ教会・伝道地及び講義所では信徒たちが精一杯の献金を献げていたのに違いないが、全てを満たすというわけにはゆかなかつた。諸集会は伝道途上で、なにしろ人数が少なかつたからである。

その欠けをミッションが負つてくれたのである。当時の牧師給は約壹百円くらいだったそうである。これをミッションが負担したのである。昭和初年はわが国と同様にカナダ本国も不況で経済が多難な時期であつたのにも拘わらずに日本伝道のために惜しみなく献げて下さつたのは感謝である。確かに明治初年には為替は一米ドル対一円であつたが、昭和初年には一米ドル対四円までに円が下がり、外貨が有利であつたであろうが、大変な出血をしての伝道であつたのに違いない。

当時の壹百円の給与はわが国の小学校校長の月給とほぼ同額であ

ったそうであるからミッションは日本人伝道者に相当の敬意を表していたと言えるであろう。人的援助はこれだけではなくて、カナダ婦人伝道会社からのもあった。各個の教会に幼稚園が付属しているところがあつたが、この幼稚園の建設と運営はカナダ婦人伝道会社が担つた。そのために日本人婦人伝道師と幼稚園教師のサポートはこの機関が実施し、経済支援は多大なものがあつたのを忘れてはならない。

このカナダ・メソジストの宣教はかくて布教を始めてから約五拾年の働きで前述のごとくに展開されてきたのである。

本格的な伝道はこれからだという時に、太平洋戦争の兆しが現れてきた。アメリカ系の諸宣教団は一九四〇年(昭和十五年)に帰国せざるを得なかった。またカナダ・メソジスト宣教団も翌年には撤退しなければならなかった。

さて、宣教師団帰国後の教会はどうなつたのであろうか。経済的には自立せざるを得なくなつたしキリスト教に対する世間の風も当然冷たくなつてきた。自立していた教会は日本基督教団に統合され

て旧来のような援助を受けることができなくなつた。それで相当数の教会・伝道所は整理され、廃止される運命にあつた。

輪島教会もそういう流にあつた。一九四一年(昭和十六年)四月には教会は無牧になつた。輪島も他の小教会や講義所と同様に閉鎖の方向にあつたが、北浜与市、千代夫妻が教会牧師館に移り住み込むことによつて教会を守り続けた。戦時下では与市氏が主として講壇を担当したが、他の信徒も時には奨励をして礼拝を守り続けた。この結果として一九四四年(昭和十九年)三月二日には四名の兄弟が七尾教会の松本以策牧師の司式で受洗したことは教会の大きな喜びであつたと記録されている。

かくて終戦を迎えることになるが終戦直後の北陸教区総会は教職五名と信徒一名の出席という寂しさであつたが、ここから再出発が可能になつたのは感謝の他はなかつた。旧メソジスト系教会は北陸三県には現在第一種教会が九教会、第二種教会が七教会、伝道所が一箇所ある。戦前との違いは現在は各教会が自立しているばかりでなくて、他を援助する立場にある。

賛美と証しの夕べ

「私の信仰生活を支える 瞑想と祈りの組会」

銀座教会信徒 白土辰子

銀座教会では約七〇〇名の会員が居住地域で分けた一八の組会に所属しています。組長は活動状況を組会世話人に報告、牧師先生が把握したうえ、毎月の役員会で情報を共有します。年に一回、伝道週間の主日礼拝後にすべての組会が教会で開催されます。

これらの組会の中で、三〇年以上前から毎月一回、信徒宅で開かれる瞑想と祈りの組会があります。「祈り」を学びたいという希望に応えて、鶴飼勇牧師のご配慮により、協力宣教師でいらした青山学院宗教部長のJW克蘭メル先生が指導くださいました。

始めは斉藤寿満子副牧師が翻訳されたUPPER ROOMで有名なマクシー・ダナムの「WORK BOOK OF LIVING PLAYER」の取り組みです。「静まる力」が日常でどのように発揮されるか、瞑想呼吸運動などにより神と向き合う訓練が新鮮で、一日一単位・四



八回で完了します。克蘭メル先生は、情性で祈っているとバランスのとれない内容になりやすく、創造性のない退屈な儀式となる危険があると問題点を指摘されました。感謝、歎願、崇敬、賛美、告白、とりなし、これらを祈りの内容とするバランス感覚を養い、生き生きとした祈りの生活を取り戻そうと励ましてくださいました。本を読み終えるまでに三年以上を要した私たちの緩やかな歩みを、先生は寛東なく感じられたでしょう。斉藤先生のご退職、さらに克蘭メル先生のご帰国を控えて、信徒だけでできるように新たなプログラムを試みました。基本は神の存

在を悟る能力を伸ばすために聖書を読むことなので、次回の組会に臨むとき、予定箇所を読んで神を待ち望む準備をするのが宿題です。

現在は使徒言行録を毎月一章ずつ読み、自分の心に訴えたみ言葉の箇所が自分の生活にどのようなように関わっているか、それに対して神は私にどのような変化を望んでおられるかについて瞑想し、次の一ヶ月に目標とすることを自分の祈りとしてまとめます。それを分かち合って順番に祈りをささげ、次の組会までの一ヶ月間、隣人のお祈りを自分も一緒に祈ることを約束します。

この分かち合いで自然に語られる個人的な告白、神様に許された感謝などを同席者は決して他所ではしゃべらない、守秘義務の自覚を前提とします。心に響く深い交わりを大切にしていくうえで欠くことのできない約束ごとです。

クランメル先生は組会の終わりにいつも、聖霊が部屋の中にあふふわと漂って空間を満たしている、この感覚がとても気持ちがいいと言われました。個人的な霊的体験を語り合うのではなく、み言

葉と向き合い、瞑想により参加者が共に聖霊を実感する時を共有する、組会の交わりでいただく聖霊、この意外性に驚きを感じました。私たちはこの時を大切にして静かに会を終るようになっています。

世界で広く実践されているメソジストの小グループによる瞑想と祈りの形を、先生が私たちの実情に合わせて整えてくださったことで順調に継続できて、私たちは恵

賛美と証しの夕べ

「メソジストの流れの中で教職として生涯を終えた平岩愼保、加藤照子、水野誠について」

阿佐谷教会信徒 水野潔子

○平岩愼保(父方の祖父)

愼保は幕末黒船渡来の頃、平岩馨明の長男として一八五六年誕生。平岩家は切支丹宗門改めの徳川幕府の役人の出であった。生来頭脳がすぐれ一四才で教員に採用されたと聞く。もともと化学を専攻していたので静岡英和学校に就職した当初はダーウィン等の思想に共鳴し、祈りとか、神の存在には抵抗を感じていた。或る日、日曜礼拝に出席し、カナダメソジストの

まれています。いただいた沢山のプリントは、夫人の日本語監修という強力なサポートがあつてこそ、私たちは何とか理解してついでいったのだと感謝の思いです。

年を重ねるたびに身体も思考力も柔軟性を失っていくのを日々痛感している私ですが、み言葉になやかに反応する力を維持して、老年期の信仰生活を送りたいと祈ります。



宣教師ジョージ・カクランの導きで一八七五年九月二一日、一九才の時受洗した。献身し伝道者として東京、山梨、長野、静岡の教会やミッションスクールで働いた。

一九二二年本郷中央会堂の牧師に任命されたが、本多庸一監督の急死のため、愼保は二代目の監督の任命を受けることになった。米国メソジスト百周年の記念会に参加のため渡米の旅行中、一九一八年七月一八日米国上院議会で開会の祈禱を献げたとのこと、外国人の監督としては初めての事であった。一九一九年日本メソジストの総会で、在職八年の監督の任を終え、後任の鶴崎庚午郎牧師に受け継いで頂き隠退した。六二才であった。一九二二年杉並の地に住居を定め、阿佐谷教会の創立の運びとなった。愼保はこの地での開拓伝道の希望はあつたが、思いは果たせず一九三三年七月二六日胃癌のため七六歳の生涯を終え神の御もとに召されていった。葬儀は青山学院大講堂(現ガウチャー礼拝堂)で日本メソジスト教会、東洋英和、阿佐谷教会の合同葬で施行された。私は五才だった。

○加藤照子(母方の叔母)一九一〇年八人兄弟の七子として誕生。五才の時幼児洗礼を受ける。東洋英和を卒業し転居のため二五才の頃阿佐谷教会に転会をした。献身の動機は定かではないが母親の祈る

後ろ姿を見て育ったことと、関東大震災の時千葉の夏の家で家屋の下敷きになり、助けられるまで神様は守って下さるとの信仰が土台になったのではないかと思われる。そして青山学院旧神学部へ入学した。卒業後一九四一年太平洋戦争がはじまり、日本キリスト教団が設立された混沌とした時代、阿佐谷教会に婦人伝道師として任命された。爾来四〇年間教会の縁の下の働きをし、一九八一年七〇才で隠退最後の婦人伝道師としての任を終え、二〇〇六年九七才で天国に帰っていった。

○水野誠（夫）

父水野良平は天文学者でもあり、キリスト教童話作家でもあった。根っからの日曜学校屋さんの親のもと一九二八年に長男として誕生した。青年になり理屈に合わない戦争時代を経て人生について考え、求道の根拠は自分の側ではなく神の手の内にあることに気づき大村勇牧師から洗礼を受けた。戦後の阿佐谷教会の近隣は大勢の子供で満ちていた。この子供達を教会が世話をしたいとの思いを牧師は若者に問われた。誠はそれに応答し、阿佐谷教会週間学校設立

の運びとなった。数年が経ち誠は自分の勉強の不足を感じ、青山学院大学神学科の入学を決意した。卒業後、数年東洋英和に在職、米国留学を経てキリスト教教育を専攻の上、青山学院大学神学科の教師

になった。大学紛争、神学科廃科後、短大に移籍して定年を迎えた。同年英和大学に新コース設立のため赴任したが、仕事途中で胃癌のため天国に旅立っていった。一九七七年六九才だった。

主題講演Ⅱ

「カナダメソヂストの日本伝道」

頌栄教会信徒 布施英雄



支えられ、そして実ったのである。

アメリカのメソヂストが広大な新天地に豊かな王国を築いたのに対して、ウエスレイアンを名乗るカナダのメソヂストは英国の精神風土を守って辺境の地にメソヂスト信仰を進展させた。

カクランとマクドナルドは早くも式の六日後に旅立った。カクラン夫婦は一二歳と五歳の娘と幼

い息子を連れて、マクドナルドは夫婦で、開通したばかりの大陸横断鉄道でサンフランシスコに行き、そこから太平洋郵船の新造船「ジャパン号」に乗る。予定だったのが遅れて、小さな香港行き貨物船に乗る羽目に。四十八日間、ほぼ地球半週の旅で横浜に着いた。米国メソヂスト宣教師マックレイに迎えられて山手の一四三番館に入り「カナダ・ウエスレイアン・ミッション」の表札を掲げて日本伝道を開始した。

通商条約から十五年を経ても外国人には厳しい行動制限があった。居留地以外は居住禁止、外出には期限付きの通行証が必要。先着の宣教師の築地居留地進出が始まるが、横浜に留まるとの本国の指令にカクランは「江戸には百万の魂が福音を待っている。八千哩離れた異境の地に派遣するのに十二哩手前で立ち止まれと言うのか」と返信。

しかし神の手が動く。其の年の十月、カクランが長老派の宣教師と共に静岡に旅した際に徳川家ゆかりの学問所から声がかかる。理化学を教えた先任者が江戸に移るので後任にという。そこでマクド

ナルド夫妻を推薦し、夫妻は翌年四月に静岡に赴任した。その一月カクランは江戸小石川の英学塾「同人社」の中村敬宇から招聘を受け、週末には開通したばかりの鉄道で横浜から新橋へ、同人社に通って聖書講義をし、八月から家族をつれて入居した。九月に静岡のマクドナルドは教授の山中笑、塾生杉山彦六ら十一人に洗礼を授け、これが第一号の静岡教会となる。カクランも十二月に中村敬宇とその家族に洗礼を授け、浅川広湖や平岩愼保に洗礼を授け、第二号の牛込教会となる。

カナダ・メソヂストの日本宣教は、三年をへて飛躍的な展開を見せる。第一はイビー自給宣教団の活躍である明治九年イビー夫妻とミーチャム夫妻が来日、ミーチャムは直ちに江原素六に招かれ沼津の集成社で伝道を開始、江原素六ら六人に授洗、第三号の沼津教会となる。イビーは帰国のカクランに代わって築地で東京伝道を統括し、二年後、山梨県南部町の青年の要請にに応じて平岩を伴って出向。甲府に移り山梨師範で教えながら伝道し、第四号甲府教会を生む。しかし明治十三年に東京に戻ると、

東京の論壇で基督教的文明論を展開し、帝国大学を越える国立キリスト教大学を構想するが反対されると、東京帝国大学に対抗して基督教文明の殿堂「中央会堂」を計画する。その資金集めに帰国すると、宣教師陣を強化するために、教師収入で生活し伝道する自給宣教師を募集。これに応えたラージ、キャシディ、サンビー、マッケンジー、コーツ等、六年間に九名の優れた人材を得て宣教を拡大した。

第二は優れた日本人伝道者の養成である。カクランは、教師養成課程を設けて研修させ、山中、土屋平岩、浅川らを教師試補、明治十四年に按手を授けて静岡、下谷、牛込の初代牧師に任命した。橋本睦之、小林光泰、原野彦太郎、外山幸平、波多野伝四郎らの牧師陣に加え、中村敬宇、江原素六、高木壬太郎らの優れた教育者を加えて確固たる日本宣教陣を形成した。明治十六年、東洋英和学校を設立し本格的に牧師養成に乗り出すが、明治十二年の宗教教育禁止令の影響で閉校し、青山学院神学部併合される。

第三は、婦人宣教師の登場である。カナダ国内の伝道で、男子の伝

道を補佐する婦人伝道者の必要が

論じられ、明治十五年ミス・カートメルが先遣として来日する。築地で日本語研修と伝道活動から、男子宣教師の補佐でなく婦人伝道者養成のため東洋英和女学校を開設する。学校は寄宿制を原則とし、女生徒達はクリスチャン教師の影響を身近に受けて伝道するように訓練される。日曜日は終日教会に奉仕する規則を設けて、違反すると退学処分もあった。明治十七年には二十人の寄宿生と二人の婦人宣教師が生活する校舎が建てられた。卒業生から四人の婦人伝道師を指導して訪問伝道を展開した。

明治二十二年にはミス・ウインテミュートが山梨英和、二十三年にはミス・カニンガムが静岡英和を創設した。ミス・カートメルの療養帰国に伴い、ミス・プレストン、続いて明治二十二年にミス・ブラックモアが来日した。彼女は、東洋英和校長を四回、山梨英和校長、静岡英和の理事など、三英和の発展に貢献、更に東京女子大学の創設、婦人矯風会の活動にも尽力した。英和の生徒と教員で組織したキリストの娘を意味する王女会は、伝道と奉仕活動から永坂孤女院を生ん

だ。

カナダ・メソヂストの宣教で特筆すべきは伝道・教育と並ぶ「社会事業」である。日露戦争の軍人遺族の遺児を引取った孤児院ではマッケンジーの金澤孤児院とエンバースンの静岡ホームがある。大正時代には女工救済に端を発したミス・アレンの愛清館があり、都市病理が生んだ細民地区に対するセツルメントではサンビー、プライス、バットが開いた愛隣団・根岸会館・共勵館がある。これは伝道・教育・救済を総合的に行う宣教方式で、それを東部東京ミッシヨンの設置、伝道・財務・日曜学校と並ぶ社会局の設置、更に基督教社会事業聯盟に発展した。

愛清館は、大正五年、東洋英和教師ミス・アレンが紡織工場の女工のための教養講話に出講することから始まった。工場地帯の借家に住んで女工を寄宿させ生活指導と伝道を開始した。不衛生な環境、遊郭に近い風紀の悪さ、独身の外国人女性が住むのは論外と反対され、資金も乏しく橋の上で鉛筆を売り、安く買うために遠い青物市場まで出かけた。援助を得て施設を建てると保育と女子クラブと夜間

学校を開き、英和や町の有志の協力で事業を挙げた。

明治二十二年、新設の金澤部を担当したサンビーは大正七年に中央会堂で学生伝道に取り組み、東部に五教会あるが川向こうの本所・深川には教会が無い。青年伝道には生活に即した取り組みが必要と考え、愛清館に近い亀戸に教会を建て、零細工場労働者の多い請地に土地を準備した(後に共勵館)。本所・深川の細民地区で東京府慈善教会が開闢する生活用品販売や簡易食堂には既に他の宗教団体が取組んでいたが、東京最悪の細民地区日暮里で始めた地区改良小住宅事業と連携して未着手の施療と未就学児童対策を開始したのが愛隣団の創設である。近くに住み込む家を探して中央会堂の協力者小林弥太郎に相談したのが機縁で、根岸の別宅(後の根岸会館)を寄附され、更に本格的な隣保館を寄贈された。病氣帰国で後輩のプライスに後を委ねた。愛隣小学校・愛隣中学校・公民講座・各種相談事業・養老保護・葬儀援助・診療事業・母子健康キャンプ・生活資金貸付・貯金組合・裁縫学校・生活援助の厚意授産事業など

を展開した。

プライスを継いだのがバットである。トロント大学の時に世界大戦に従軍し、戦禍に苦しむ人々への思いから社会事業を志して日本宣教を志願した。父は「立派な日本人になりなさい。カナダのことは忘れてな」と言った。彼は日本人になりきって働いた。日米開戦で帰国を迫られた時、彼は初めて大声で泣いた。だから、敗戦を迎えると真先に戻ってきた。飢餓に喘ぐ日本人三千万人を救うララ物資を持つて・・・。

更新伝道大会の報告

委員長 小宮山 剛

八月二七日、二八日、今年も青山学院を会場にして、更新伝道会の第四一回大会を開催しました。今年の主題は「伝道するメソジスト」。日本伝道の停滞が叫ばれる中、日本伝道に情熱を傾けたメソジストに学ぼうということです。

本部礼拝堂での、山北宣久青山学院長の情熱的な説教で幕を開けました。続いて、今年新たにオープンした一七号館の本多記念国際会議場に会場を移してプログラムが

持たれました。

隠退教師の大隅啓三先生によって「メソジストの地方伝道」と題して主題講演がなされ、先生が接したメソジスト教会の、採算を度外視した伝道が紹介されました。

夜は、阿佐ヶ谷教会の水野潔子姉と銀座教会の白土辰子姉による証しがなされ、また共に賛美を歌う時となりました。

二日目は、台風が見舞う中、沖繩から駆けつけた読谷教会の具志堅篤牧師の説教による朝の礼拝がなされ、続いて頌栄教会の布施英雄兄による「カナダ・メソジストの日本伝道」の講演によって、カナダ・メソジストの日本における多岐にわたった働きを学びました。最後に小友聡東神大教授の説教による献身追悼礼拝がもたれ、一同心を新たにされました。

青山学院はじめ関係者のご好意とご協力で心から感謝いたします。

会計報告

二〇一二年四月一日より二〇一二年九月三〇日までに年会費、寄付金、献金、及び会誌代を受領した

方々と、教会および団体名を報告。(概ね受け付け順、敬称略)

年会費

四月 鶴飼栄子、田中霞、岸貞子、鎌田重子、斉藤始、松崎永任、宇留賀一夫、大橋輝美、山中達郎、櫻山伊作、永吉章三、青木研甫、阿部正和、清水光雄、竹前ルリ、野村誠、鶴崎庚一、伊藤地塩、山内一郎、犬飼護朗

五月 土屋廣紀、東瀧様、布施英雄、片山秀夫、齋藤孝、西村澄子、小林貞夫、笠原康子、宮原亨、西川和子、大村栄、山口文恵、越智千鶴子、岸田紀、宇都宮佳果、松浦義夫、高橋はつ

六月 後藤哲夫、阿部志郎、海老名民喜、保々と宏

七月 松崎永任、松山幸生、伊澤しのぶ、坂井賢治、一瀬和子、吉富美幸、川俣茂、齋藤寿満子、野瀬千鶴子、田添禧雄、鶴崎庚一、清水光雄、高田和彦、大橋弘、宇留賀一夫、加藤孔二、菊池トヨ、阿部正和、粟津安和、岸田紀、坂上三男、小宮山剛、加藤順子

八月 湯澤裕、シュー土戸・ポール、東方敬信、深町正信、西村清、広瀬智恵子、安藤博子、松崎永任、角谷貞夫、角谷多美子、小出直久

- | | |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------|
| 石渡伸一、林牧人、米山恭平、黒田毅、黒田裕子、佐藤謙吉、有馬一宇、金明淑、真壁巖、梅津裕美、松木田博、真壁勝一、真壁キヌ枝、石丸泰樹、山北宜久、江渡信行、大三島義孝、千原創、高田和彦、石田聖実、小林克哉、土屋利子、ジョージ・ギツシユ、森研四郎、林誠二、岩本聖史、西田寛子 | 笠原康子、林牧人、玉野保美、小宮山剛、白土展子、金井次夫、西村澄子、石丸泰樹、田中霞、高田和彦、森研四郎、小友聡、水野潔子、布施英雄、山北宜久、西田寛子 |
| 九月 倉形彰、玉野保美、牧野佳子、伊藤瑞男、森言一郎、伊藤地塩、高田和彦 | 九月 伊藤久男、倉形彰、牧野佳子、伊藤瑞男、伊藤地塩、坂井賢治、保々和宏、高橋はつ、永吉章三 |
| 法人会費 | 法人寄付・献金 |
| 四月 広尾教会 | 七月 鳩山伝道所 |
| 七月 本多記念教会、九段教会、熊本白川教会、青山学院宗教センター | 八月 島村教会、青山学院、相模原教会 |
| 八月 佐原教会、聖徒教会、島村教会 | 会誌代 |
| 九月 小樽教会、碑文谷教会 | 四月 広尾教会 |
| 個人寄付・献金 | 五月 後藤哲夫 |
| 四月 鎌田重子、斎藤始、宇留賀一夫、永吉章三、伊藤地塩 | 七月 熊本白川教会 |
| 五月 齋藤孝、笠原康子、山口文恵、越智千鶴子、高橋はつ | 八月 深町正信、中島康三、中江松二、伊豆邦子 |
| 七月 伊藤しのぶ、一瀬和子、吉富美幸、田添禎雄、宇留賀一夫、粟津安和、片山秀夫 | 九月 玉野保美 |
| 八月 湯澤裕、東方敬信、深町正信、吉富美幸、西村清、松崎永任、大橋輝美、角谷貞夫、角谷多美子 | |

会費納入のお願い

更新伝道会の活動は会員の会費と献金とで行われています。今年度の会費をぜひとも早いうちにお納め下さい。また、長年お忘れの方は今年度からでも結構です。ので、宜しく願います。

大会の朝の礼拝、追悼・献身礼拝の記事は誌面の都合上割愛致しました。次号掲載致します。



書記報告

常任委員会

(九月二四日・出席一八名)

- ・更新伝道会大会の報告を受けた。出席者一六〇名、教会数四五
 - ・本年度は多くの神学生が出席し感謝。
 - ・全体委員会についての報告を受けた。二〇一三年一月二九、三〇日、於湯河原
 - ・国際交流委員会より提案 二〇一三年二月二七日―二八日。日韓交流会を計画詳細は別紙。
 - ・各委員会報告。
 - ・回心記念記念の茶菓子代、会場費を予算化。
 - ・次世代委員会に対しての意見が述べられた。
 - ・次回十一月二〇(火)銀座教会報告
- 竹岡教会が新会堂を建築。献堂。
- 消息
- 故太田寛牧師召天。中渋谷教会に於いて告別式が行われました。
- 故木山房子姉召天。鳥居坂教会に於いて告別式が行われました。
- 故林慶子姉(林牧人牧師御母堂)召天され鳥居坂教会に於いて告別式が行われました。